

家族を抱え夜間大学院で学ぶ社会人大学院生の就学環境づくりに向けての調査研究

(代表者) 教養学科健康生活科学講座 教授 碓田 智子

(分担者) 同 教授 岡本 幾子

1. 本事業の目的

夜間大学院・健康科学専攻には、看護師などの医療職、栄養士、福祉職、各種専門学校教員などの専門職に従事し、大学院に通う院生が多い。2013年度に健康科学専攻の修了生（主に女性）を対象に行った調査結果（「子育て世代の社会人大学院生の就学環境づくりに向けての実態把握」）では、院生の多くが職場の支援がない中で、自身の努力と家族の支えによって就学を可能にしている実態が明らかになった。また、修士論文の研究と仕事でゆとりがないため、子どもに向き合う時間が十分に取れないことに負い目を感じながら学ぶことなどが浮かび上がった。

本事業は、昨年度の調査結果を発展させ、男性の社会人院生が抱える課題等に対しても視野を広げ、年齢や職業、家族状況などの多様性を持つ社会人大学院生が就学しやすい環境整備に知見を得ることを目的とする。

2. 調査方法

1) 子どもの預かり支援に関する他大学の事例調査

昨年度の調査の中で、大学院修了生から、「家に誰も子どもをみてくれる人がいない日があった時に、大学に子どもを連れてきて授業やゼミを受けたり研究ができるよう、キッズルームなど子どもの居場所がほしい」という声があった。学内に保育施設や子どもの一時預かり施設を設けている事例として愛媛大学と奈良女子大学でヒアリング調査を行うとともに、国立大学のホームページから子どもの預かり支援施設の状況を把握した。

2) 夜間大学院生との座談会（2015年2月15日実施）

健康科学専攻の院生8名にご協力いただき、座談会を形式で意見交換会を実施した。院生の年齢は40歳代～60歳代で、家族を抱える男女各4名である。職業は公務員、専門学校、医療機関、文化サロン勤務などである。主なテーマは、①職場の理解や支援、②家族の理解や支援、③家庭生活と大学院の両立、④本学の就学環境への意見・要望である。

3. 子どもの預かり支援に関する他大学の事例

国立82大学のホームページを検索したところ、学内に保育施設（一時預かりを含む）を持つ大学は29校（35%）であった。経営管理は、大学が行うもの、NPO法人に委託するものなどがある。また、大学関係者だけでなく地域住民も利用できるものもある。

奈良女子大学の「ならっ子ルーム」は、子どもの一時預り施設である。事前登録により、子育て中の学生も利用可能である。サポーター養成講習を受けた地域住民や学生が託児時間の面倒を見る。夜間は10時まで対応している。また、奈良女子大学では学生対象の育児奨学金制度や女性院生の学術論文投稿費補助も設けられている。愛媛大学の学内保育所「えみかキッズ」は、学生が保護者である乳幼児も保育対象である。運営は民間委託で、夜9

時 30 分までの延長保育も行われている。学内で乳幼児の姿を見ることは、特に教育学部学生の意識付けにも効果があるという。

4. 家族を抱える社会人院生の課題について

1) 職場の理解について

定時退社を認めてもらっている職場もあるが、それ以外では、大学院での就学にあたり職場からの支援はない。日々の業務が多忙のため、仕事時間を削ってまで大学院に通うことに否定的な考えの同僚も多いとのことであった。職場の理解を得られないため、退職することで大学院進学を実現した院生もいる。

2) 家族の支援と家事などとの両立について

女性院生の場合は、子どもや夫からの励ましや家族の家事手伝いに支えられて就学を可能にしている。特に子どもが、働きながら大学院で学ぶ母親の姿を理解してくれるようであった。一方、男性の場合は家計を支える役割が強いため、子どもの受験と重なると家計の負担が大きいことから、家族の理解を得にくかったとの意見も聞かれた。

男性院生は入学前から家事をあまり負担していなかったため、大学院入学後も家事との両立に対して問題意識が低い。一方、女性院生は配偶者がかなり家事を負担してくれることで、何とか家庭生活との両立を図れている。帰宅が夜 10 時～11 時になるため、子どものことを気づかうことができず、子どもの忘れ物が増えているとの話もあった。

3) 就学環境への要望例

- ・授業に出席したくても、仕事の都合で授業に間に合わないことが多い。教員側はそのことに理解があるが、聞きたかった授業を聞けないのがとても残念である。あとで授業の資料等を見ることができるとシステムがほしい。
- ・所得額ではなく、社会人院生の家庭状況（子どもが私立に通っている、ローンを抱える等）に配慮した奨学金制度を設けてほしい。一定の所得はあっても、子どもの進学等で家計に余裕がない場合もある。
- ・社会人院生も学部学生と同様に、保護者名の記入を求められることに違和感がある。
- ・社会人院生は休日にしか研究の時間がまとまって取れないので、土曜の午前や日曜日にも図書館を開館してもらい、学べる環境ができると有り難い。

4. まとめと課題

家族を抱える社会人大学院生の就学上の課題は、ジェンダーによって若干の違いが見られた。大学院入学前から家事を負担していた女性の方が家事と大学院生活との両立に苦慮しているが、配偶者や子どもたちからの応援がある。一方、男性院生は家計を担う役割が大きいと、子どもの学費負担の上に父親が大学院に行くことに家族の理解が得られにくいようである。今回の座談会出席者には小学校低学年以下の小さな子どもを抱える院生はいなかったが、愛媛大学や奈良女子大学ほか、他大学の子育て支援サービスは、本学の社会人大学院生の就学環境対応にも応用可能ではないかと考えられる。社会人大学院生の課題について定期的に聞く機会を設けることが、就学環境の整備に重要である。